

令和元年度活動計画

長生きの時代になり、私たちはこれまでにない長い高齢期を生きることになります。ここ数年、子ども・若者が増えないのに独身者と高齢者と認知症の人が増え、介護保険利用者が増えることが騒がれています。

そういう時代だから、たすけあい活動は必要だし、期待もされています。有償の個別支援だけでなく、居場所・通いの場や高齢者や障碍者が参加でき、活動できる多様な場を無数に創って、人びとがつながりあえる社会にしていこうとの試みが日本中の各市町村で始まっています。四街道市も、支え合い推進会議が中心になって、各中学校区での支えあいづくりの取り組みが盛んになってきています。旭が丘やみそらで住民による「ちょこっとサポーター」などの活動が生まれてきています。

そうした中で、私たちふきのとうは、本来事業のたすけあい活動をどのように位置づけたらよいのでしょうか。今年もその模索は続きます。

最近は、助けあいも障がいサービスも介護保険サービスも、混然とまじりあって利用されることが多くなっていますが、その傾向は今後一層強くなるでしょう。その視点で見るならば、ふきのとうの「たすけあい」に求められているのは、障がい者サービスや介護保険サービスと同じ質の高さ、つまり専門性の高いプロと同質のケアです。プロのサービスを安価に提供することについて、介護スタッフは矛盾を感じるかもしれません。こうした視点からもふきのとうの「たすけあい」について検討しなければなりません。

従来のたすけあいを継続して、さらに新しいたすけあいの形をつくるのか、その場合従来のたすけあいと新しいたすけあいは何処で線引きをするのか、しんどい議論になりますが、避けて通れない検討事項です。

また、二つ目には、ふきのとうの運営体制についてです。

ふきのとうは、たすけあい活動とコーディネーター部門を含む事務局は収益を生み出せないところです。その人件費と事務所賃料などの管理費は、事業部門が生み出さなくてはなりません。自由な活動を保障してみんなが少しずつの力を出し合って運営していたふきのとうが、一定程度の益を生み出さなくてはならないところにだんだん移行てきて、今やその歴史の方が長くなりました。常勤職の誕生、それに伴う拘束や社会保障費や保険料などの負担も増えてきています。ないないづくしの中でつましく、好きなように活動していたメンバーにとって、資格があるばかりに専門的な部門の歯車の一つ組み込まれたように感じて〈こんなはずじゃなかった〉と思う人も、ふきのとうで働く新たな意義を見出していくように、地道に話し合いや検討を続けたいと思います。

それそれがモチベーションを失わずに、コーディネート部門を含む事務局と、各事業部門との協力体制をどう創っていくか、引き続き模索します。